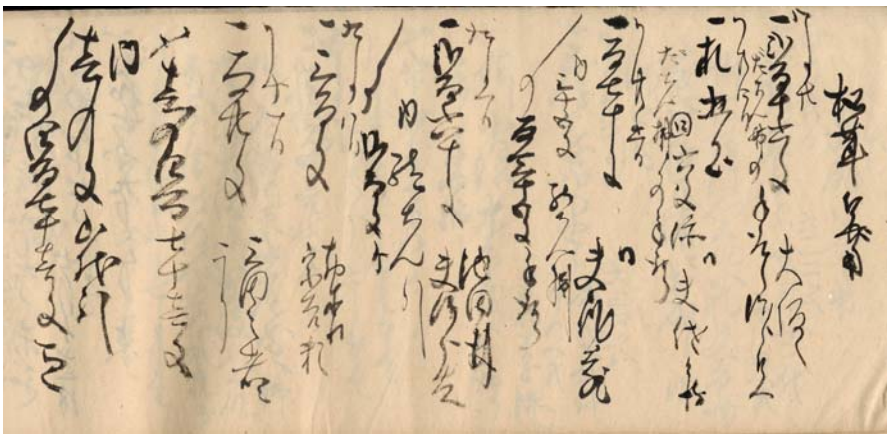
みのりの秋を前に

厳しい残暑が続きますが暦の上ではすでに初秋、実りの季節もまもなくです。米どころの三田ですが、江戸時代の農村では市史第４巻近世資料の322号にみられるようにさまざまな産物や製品も人々の貴重な収入源でした。その代表が秋の味覚松茸です。

天保13（1842）年の高平地区の史料である321号（写真）には、この年の松茸は旧暦の８月20日（今年の新暦では９月30日）から９月11日（同10月21日）までの間に４回にわたって大坂・池田に出荷されたほか三田などからの買い付けもあり、合計１貫470文（１貫は1000文で当時は約160kg分の米価に相当）の粗収入を得たことが記されています。このうち１貫は山代引とあるので、おそらく事前に松茸山の入札がありその落札代金として支払われた額を示すのでしょう。差引き470文が粗利益となりますが、わずか１ヶ月弱の期間の利益率は47％で現代的にみれば松茸山は魅力的な投資対象であったようです。



天保13(1842)年の松茸販売に関する決算書

続く323号は、下深田村の松茸山の持ち主が連名で三田藩の山奉行に留杭（とめぐい）の下付を求めた願書です。それによると近隣や町方から村内の松茸山へ侵入し、松茸を求めて松林を掘り返すなど山を荒らす者が多くいるので、銀50匁（もんめ）（＝銭３貫330文強）の上納と引き換えに部外者の立ち入りを禁止する留杭を下付して欲しいとあります。続く324号に三田藩の松茸留山（とめやま）の一覧が掲載されていますが、これらの留山には下深田村の例のように松茸（山）を藩の権威を借りて守るため、形式的に「上納」された山も多かったと思われます。これらの事象もまた、京阪神という有望な市場を背後に持つ三田産の松茸がもつ経済的な魅力ゆえのことです。

三田の自然がもたらす松茸は、地域の人々そしてこの地を支配した藩にとって貴重な天の恵みでした。その確保をめぐって、山の入札や防衛をめぐる攻防がみのりの季節を前にしたこの時期に繰り広げられたのです。

総務課市史編さん担当